

インド学への道しるべ

— 素 描 —

雲 井 昭 善

インド学とは

「インド学」という名称は、ヨーロッパにおける Indologie という学問をさすわけであるが、ドイツ、オーストリアにおける大学での講座では、インド学とイラン学 Indologie und Iranistik といわれる如く、イラン学と関連して講座が設立されているところが多い。たとえば、ウィーン大学の講座名は Indologie und Iranistik であり、ミュンヘンの大学やノルウェーのオスロ大学でもそうである (Indo-iransk Institut)。しかし、ドイツの大学では、Indologisches Seminar の名称が一般的である。たとえば、ボン、ゲッティンゲン、チュービンゲンの諸大学などそれである。ベルリン自由大学では Indogermanisches

Seminar と称し、ハンブルク大学では Seminar für Kultur und Geschichte Indiens と呼んでいる。しかし、アメリカでは、この Indologie に相当する Indology は使わないで、Indian Study (Studies) と称するのが普通である。たとえば、ハーバード大学では、一九五一年以後、Dept. 名は Skt. and Indian Studies である。もっとも、一八八三年には、Indo-Iranian Language という Dept. 名であったが。

わが国では、インド学という名称は定着しているが、国・公・私立大学の講座で、インド学という名称を公的に使っている大学はほとんどない。国立大では、インド哲学科の名称を用いるのが一般であり、その中に佛教学を含めているところが多い。

日本の「印度学佛教学研究」誌の名称は、*Journal of Indian and Buddhist Studies* であるところからすれば、〈インド学〉は、*Indian Study (Studies)* に相当する。その学術大会で発表されるインド学の分野(第一部会)に属するものは、インドの哲学、文法学、宗教、政治、社会、美術、そして現代インドに関するすべてである。その厳密な枠組みは定められてはいないが、古典サンスクリット語、ヒンディー語、ベンガリ語、イラン語による文献研究が含まれる、と理解してよい。したがって、わが国における〈インド学〉は、いわゆる〈印度哲学〉という枠から拡大され、インド思想史の中で、サンスクリット語、ヒンディー語などの現代インド語を中心とする諸文献を扱ったものが中心となつていくことに気づくのである。そこには、インドの宗教、哲学、文学、文典学、天文学、数学はもとより、現代インドに至るまで広範囲に亘っている。したがって、古典インドから現代インドに至る諸問題が、すべて研究対象であると言つてよい。

本学では、佛教学科の中に佛教学コースとインド学コースの二コースが設置されている。このことは、本学におけるインド学の位置づけを示唆するものである。すなわち、インド学はそれ自体、独立の学問分野でありつ

も、常に、佛教学との関わりの中で問われることを意味している。佛教学コースについては、かつて本誌「佛教学セミナー」を通じて、それぞれの担当者が〈道しるべ〉を執筆した。すなわち、インド佛教への道しるべと題して、原始佛教(1)(2) (舟橋一哉「セミナー」五、六号)、中観佛教(3) (安井広済「同」七号)、唯識佛教(4) (安井広済「同」十号)、戒律佛教(5) (佐々木教悟「同」十一月号)が、次いで佛教史への道しるべ(佐々木教悟「同」九号)、原始佛教研究の道しるべ(1)(2) (佐々木現順「同」十二、十三号)が執筆された。中国佛教への道しるべとして(1)(2)(3) (横超慧日「同」一、二、三号)が、チベット文献研究への道しるべとして、(1)(2) (稲葉正就「同」十六、十九号)が、それぞれ本誌を飾っている。こうしたなかで、インド学コースの学問分野とインド学への道しるべが、編集部から希まれたわけである。しかし、広汎な領域に亘るインド学への道しるべを執筆するのは容易でない。そこには、いろいろの方法が模索されるだろう。ここでは、すべての分野に亘って叙述することはひかえたいし、かつ、一つの研究対象に関しても、参考文献を網羅できないので、筆者が最小限、必要と思われたもののみをとりあげることにした。個々の研究分野についての問題提起、文献資料、

叙述に関してはいづれ稿を改めることにし、今回は、あくまでもインド学における研究分野を重点的にとりあげることとした。したがって本稿は、インド学への道しるべとしては素描であることを、ことわっておきたい。

インド学の学問分野——全体像の把握——

「東洋思想の源泉といわれるインドの思想とその背景となった宗教、哲学の探究を中心に、文学、美術、政治、経済などいわゆる文化史的、社会史的背景からもアプローチしようとするのが、インド学の学問分野である。」

とは、本学の学生便覧の専門コース概要に述べた一文であるが、インド学の学問分野は、インド思想の全般に亘る広範囲の学問である。しかし、本学においては、佛教学科の一コースとしてインド学コースが置かれていることを、常に忘れてはならない。そのことは、本学におけるインド学の目ざすものが、いわゆるインド哲学プロバ—のものとしてではなくて、佛教をより広く、巨視的に把握するためのインド哲学ということにある。だからと言って、佛教に基本的立場を置いてインド哲学を把握する、

というのではない。むしろその逆で、佛教をインド哲学、宗教の上で、より簡潔に言えばインド思想という溶鉱炉の中で把握しようとするものである。佛教を佛教内において把握することもさることながら、佛教をインド思想の上でより明確に把握するには、佛教史という縦の流れはもちろんのこと、横との関わり、つまりインド思想という広い視座を必要とすることを意味している。そのことは又、一般に外教と称せられるインド哲学、宗教においても妥当する。したがって、佛教学とインド学とは、佛教と外教との交渉という相互関係をもつものである。この両者の緊張関係の中で、佛教学もインド学も、それぞれの研究が深化されるにちがいない。

試みに、アビダルマや大乘の論書を眺めたとき、そこに登場する外教についての紹介、批判が多いことに気づく。佛教という哲学、宗教を外教との関わりの中で確立し、その存在意義を明確化するためには、いつの時代、いずれの場合にあっても、批判精神が必要な条件である。しかしその場合、われわれにとって大切なことは、佛教側の論書において批判され、紹介されたその外教が、そのまま、正当に評価されていたか否かという批判であらう。批判された外教がそのまま外教だとみる立場を超え

て、批判される外教の立場を正当に把握し、みずからの批判の眼を養うことが肝要である。そのことは、インド哲学側の哲学書にあつても同じである。外教の哲学書に批判される佛教が果たして佛教を正当に把えていたか、という問いかけが、常に要請されるからである。

凡そ二つの異質な思想、哲学、宗教が討論の場を設定するとき、一方が他方を、他方が一方を批判し破折するのは当然である。でなければ、一つの思想、学派、哲学が独立して存在する意義と価値を失うからである。もつとも、一方が他者の延長線上に、つまり、エピゴーネンとして同一平面上に置かれる場合もあるが、インドの諸哲学は、大別してナーステイカ(Nāstika)に対するアーステイカ(Astika)、無我論に対する有我論として相対立する。その場合、佛教が異教を、異宗・外教が佛教を批判するのは、至極、当然のことである。しかし批判する側が自派の立場を固執し、一つの固定した視点から他者を批判した場合、批判される側の立場は時に歪曲化され、屈折されている場合が多い。それは、他者を正当に理解評価したものとは言えない。他者を正当に評価し把握するためには、少くとも他者を正しく評価、理解することが前提である。かくて、佛教をより正しく理解するには、

佛教を佛教の内部にとどまつてではなくて、インド思想つまり外教との思想的交渉の中で把握する必要がある。し、他方、外教を正当に理解するには、外教内部での交渉はもとより、佛教との交渉の中で、何が特色であり何がその存在意義であるか、を、明確に把えねばならない。したがつて、佛教を、そして外教を正当に評価するには、広くインド思想の上に立つた巨視的な眼が要求される、と言わねばなるまい。

このように把えてみると、本学におけるインド学の学問の目ざすところも、自ずから浮き彫りにされてくる。すなわちインド学は、学問・研究内容の分化に先き立つて、インド哲学史、インド思想史の全体像を明確に把握することからはじまる、と言えよう。そのことは、思想の時代的区分、すなわちその時代時代の思想、思想家、哲学者が織りなす思想の凝集をみきわめることにつらなる。この思想史の編纂は、この思想の凝集がからみあつたいくつかの分水嶺によつて形づくられる。それが、古代から近代・現代に至るまでの歴史である。とすれば、インド学の学問分野は、先ず以て、時代区分に立脚した歴史観を要求する。それは、思想史を扱う場合、いつでも必要

な条件の一つである。かくて、インド学への道しるべは、インド思想史に関する適切な紹介書を先ず手にし、インド思想の全体像に対する的確な把握が望まれる。この条件にかなった参考書を、二、三列挙しよう。

インド思想史、哲学史に関して。

中村元著『インド思想史』(岩波全書、一九五六・六八)。著者がはしがきの中で述べるように「インド思想史全体を小冊子にまとめることが困難である」とこと、「インドの典籍は成立年代がはっきり解らないし、歴史的に区切って叙述すると難点がつきまとう」という点から、柱となる宗教・思想・学派を十一の章に分けてインド思想を叙述している。叙述は平明であり、各章節の終りに参考文献を列挙しているので、読者は、インド思想の形成とその展開について、あらゆるサイドからアプローチするための予備知識をうることができる。

金倉圓照著『インド哲学史』(平楽寺書店、昭和三十七年)。

著者の思想的叙述として『印度古代精神史』(岩波書店、昭和十四年)、『印度中世精神史』(同上、昭和二十四年)及び中(同、昭和三十七年)にもみられるように、斯学における諸研究の成果に立脚した客観的叙述による確かなが

目立つ。全篇を二十章に分け、各章ごとに参考文献の主なるものを付している。その内容は、表題にインド哲学史とうたわれてあるように、主としてインド哲学の叙述である。

ところで、われわれの学生時代は、印度哲学史に関するものとして宇井伯寿著『印度哲学史』(岩波書店、昭和七、四十年)、同『印度哲学史』(日本評論社、昭和十二年)を参考にしたものである。著者の『印度哲学研究』全六卷(後述)の成果を踏まえた、わが国におけるインド哲学史研究の羅針盤的役割を果たしたものであり、とりわけその年代論に関しては、その後の研究者の礎石となった。他方、ヨーロッパにおける代表的著作として、P. Deussen: *Allgemeine Geschichte der Philosophie* I, 1-3, Leipzig, 1894. にはじまり、資料的意義をもち、S. Dasgupta: *A History of Indian Philosophy*, 5 vols., Cambridge, 1922 f. や、西洋思想とインド哲学との比較がうかがわれる S. Radhakrishnan: *Indian Philosophy*, 2 vols., London, 1923, 1927. などが挙げられよう。ヨーロッパにおける最近の印度哲学史に関する著作としては、E. Frauwallner: *Geschichte der indischen Philosophie*, I. Band, Salzburg, 1953; II. Band, 1956. を挙げた。

全五巻の完成をみずに他界（一九七四年七月五日）したのが惜しまれてならない。

よく言われるように、史書を欠くインドの思想を思想史、時代区分的に叙述することは困難である。ヨーロッパのように、古代、中世、近世というようには、インドの場合にはゆかない。政治史の変動と精神史の変革とがバラレルしないという理由による。とすれば、第一には、どうしても漠然とした時代区分、たとえば古代、中世、近世、現代と四分した時代区分の上で、問題中心にとりあげる方法が模索される。第二には、宗教、哲学、文学（言語学を含めて）、美術、政治・経済を含んだ文化的、社会史的研究のジャンルの中で、これを整理してよくという方法が考えられる。とは言っても、宗教と哲学、宗教と文学、宗教と美術、そして宗教と社会の諸問題が交互にからみあっているインドにあっては、常に横との関わりを無視するわけにはいかない。近代インドの思想家、たとえばヴェーヴェーカナーンダの思想を考える際に、彼の思想的背景、ルーツはヴェーダーンタ哲学の不二元論、更にはウパニシャッド哲学の中に見出されるし、現

代インドの生活様式、もしくは習俗は、古代インドのカースト制度確立ときりはなしては考えられない。文化的にも、思想的にも、そして日常性の中にも、古きものと新しきものが何の矛盾もなく息づいている。それがインドである。とすれば、現代インドの思想は、常にヴェーダに回帰しなければ正当に把握されない、と言わねばならない。インド学への道しるべは、インド思想史の全体像を把握することからはじまる、と述べたが、インド思想の全体像を把握するためには、その出発点として、古代インドの宗教・哲学の把握からはじまることを意味している。（いわゆるインド史に関しては、五の項においてふれる。）

ヴェーダの宗教を把握にあたって、何よりも先ずとりあげたい書として、辻直四郎著『インド文明の曙』（岩波新書、一九六七年）と、同『リグ・ヴェーダ讃歌』（岩波文庫、昭和四十五年）がある。この二書は、それに先き立つ著者の名著『ヴェーダとウパニシャッド』（創元社、昭和二十八年）とともに、ヴェーダ学を知る上で必読の書である。この書には、古代インド人が模索した人生の苦闘が種々の角度からヴィヴィッドに描かれている。

来世・輪廻の問題、祭式と呪法、古代人の倫理観、そしてウパニシャッド哲学が、著者の学問・研究に対する厳しい姿勢によって貫かれている。とくに、その附篇——ヴェーダ学の今昔——は、巻末に付せられた歴大な参考文献『ヴェーダ讃歌』『インド文明の曙』の巻末に加筆された資料とともに、必見の資料である。なお、著者に近著『ヴェーダ学論集』(岩波書店、昭和五十三年)があり、ヴェーダ学に関する著者の諸論叢の中でも得難い論文を収めている。

最後に、ヴェーダ研究にとって、M. Bloomfield: *Vedic Concordance* (HOS, No. 10) Baltimore, 1906, Delhi, 1964. 及び *Vedic Index of Name and Subjects* by A. A. Macdonell and A. B. Keith, 2 vols, London, 1912. を挙げたい。

ウパニシャッド哲学について。

インド哲学の始源として、そして後代のインド哲学、もしくはインド思想に大きな影響を与えたウパニシャッドの哲学は、インド思想史上、一ピークをなす古代インド人の思索の凝集である。少くとも、インドの学派哲学を研究対象とする場合、古典のウパニシャッド文献を通

過しなければ十分に理解できない、と言って過言ではない。とりわけ、思想の背景としてウパニシャッドに依拠するヴェーダーンタ哲学、そしてその対極に位置するサーンキヤ哲学のソースについて、ウパニシャッドの哲学の位置づけは、けだし大きなウエイトを占めるものである。このウパニシャッドの研究に際して、その文献学的研究の面はしばらく措き、少くとも以下に挙げる研究書が入門書として必要であらう。

S. Radhakrishnan: *The Principal Upanishads*,

Introduction, Text, Translation. London, 1953.

P. Deussen: *Sechzig Upanishads des Veda*, 2.

Aufl. Leipzig, 1905.

R. E. Hume: *The thirteen principal Upanishads*,

2nd. ed. London, 1931.

L. Renou: *Les Upanishad. Texte et traduction*

sous la direction de Louis Renou, Paris, 1934

Sqg.

P. Deussen: *Die Philosophie der Upanishads's*

(= *Allgemeine Geschichte der Philosophie*, I, 2),

Leipzig, 1899.

F. Max Müller: *Upanishads*, 2 Parts, 1879, 1884.

(SBE, I, Vx.)

わが国における翻訳として、高橋順次郎監修『ウパニシャッド全集』九卷(世界文庫刊行会、大正十一年)、及部分訳として、世界古典文学全集3『ヴェーダ・アヴェスター』(筑摩書房、昭和四十二年)がある。研究書としては、前記辻直四郎著『ヴェーダとウパニシャット』金倉圓照著『印度古代精神史』がある。なお、H. Oldenberg: *Die Philosophie der Upanishaden und die Anfänge des Buddhismus*, Göttingen, 1915 (高橋順次郎・河合哲雄共訳『ウパニシャッドより佛教まで』大雄閣、昭和五年)は、古典的書物として一度は読んでおきたい。

ウパニシャッドに関するテキストとして最も便利なものとしては、*Isādvinsottarāsātopaniṣadāḥ* (A Compilation of well-known 120 Upaniṣads), Nirṇayasāgāra-press, Bombay, 1948. がある。

ウパニシャッドと言えば、古ウパニシャッド群にづくくわゆる中古ウパニシャッド群がある。この両者のきわ立った相違についての理解に資するものとして、金倉圓照著『印度中世精神史』上を挙げたい。なお、中古のウパニシャッド群を代表する『シエヴェーターシエウヴァタラ』及び『カータカ』に関する研究として、次の二書

がある。

R. Haushild: *Die Setaśvalana-Upaniṣad*, (Eine kritische Ausgabe mit einer Übersetzung und einer Übersicht über ihre Lehren) (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, XVII. Band, No. 3., Leipzig, 1927.)
Rudolf Otto: *Die Katha-Upaniṣad*, Übertragen und Erläutert, Marburg, 1936.

この二ウパニシャッドが、とりわけ中古を代表するものとして挙げられたのは、やがて学派哲学のサーンキヤ、ヨーガへの胎動を孕んでいたことにある。その意味でひととき重要度があると言われる。しかも、やがてギーターに成熟する神の恩籠、一神教宗教への導入部門となるからである。

三

叙事詩文学——インド文学——

インド文学(文芸)に関して、最も豊富な文献資料をあつめた画期的な業績として、われわれは M. Winternitz: *Geschichte der indischen Literatur*, 3 Bde., Leipzig, 1908. を挙げねばならない。この書は、著者がその緒言

(プラハにおける、一九〇七年十月十五日の日付)に述べるように、「国民の学究社会をあてにしたものではなく、国民の教養人」に向けられたものであり、文献の解明とインドの民族的な叙事詩、プラナーナに関してはその内容概説、抜萃が挙げられている。しかもその文献紹介は、専門の研究者に対する考慮がなされ、かつ、論争に対する著者の立場を明示している。かつてドイツに留学したわが国の先学人たちは、この書を購入し精読したと聞か、幸いなことに、この大著『インド文献史』が故中野義照先生によってこの和訳の大業(訳註)がなされ、全六巻中の五巻を完成して昨年他界された。そして先生の一周忌に最後の『佛教文献』が完成し、ここに全六巻の訳註が学界に提供された。すなわち第一巻『ヴェーダの文学』、第二巻『叙事詩とプラナーナ』、第三巻『佛教文献』、第四巻『ジャイナ文献』、第五巻『インドの純文学』、第六巻『インドの学術文献』(高野山大学内、日本印度学会会刊)がそれである。その和訳補註には、現代に至るまでの研究成果が網羅しつくされ、原著『インド文献史』に錦上花を添えたことは、わが国の学界にとって一大慶事と言わねばならない。ここに、故中野義照博士ならびに高野山大学の関係者に深甚の謝意を表したい。なお、原著に対

する英訳として、Dr. S. V. Ketkar: *A History of Indian Literature*, tr. by Mrs. S. Ketkar, 2 vols., University of Calcutta, 1927, 1933. がある。

宗教と哲学、宗教と文学は、インドの場合、不可分の関わりにおいて扱えねばならない。そのことは、既に述べた通りである。この顕著な面は、ヴェーダ文学の中に既にうかがわれるのであるが、中古ウパニシャッド哲学と文学との関わりをおもいうとき、われわれは、叙事詩文学の位置づけを明確にしなければならない。もっとも、叙事詩文学は、ヴェーダやウパニシャッドがバラモンの宗教・哲学であるのに対し、これはクシヤトリアを素材の主なるものとして生まれた文学である。そこには、後代のヒンドゥーイズムへの足音を聞くのであるが、M・ヴィンテルニッツの『インド文献史』中の『叙事詩文学』と並んで、われわれは、近代の力作として、次の一書を挙げたい。

Jan Gonda: *Die Religionen Indiens*, 3 vols., Stuttgart, 1960, 1963, 1964.

この書は、I. Veda u. älterer Hinduismus, II. Der jüngere Hinduismus, III. Buddhismus, Jainismus, Primitivvölker. の三冊から成るが、こゝでは、特に

第二冊目をとりあげてみよう。この第二巻目の内容は、

I 叙事詩時代以後のヒンドゥー教の歴史的發展の主段階。
II ヴィンシュヌイズム。III シンヴァイズム。IV 十九、二〇世紀のヒンドゥー教。に分かれるが、何と云っても問題の中心は、現代ヒンドゥー教のソースを学問的に体系づけた点にある。いわゆるヒンドゥー教を形成するブラフマナー、シヴァ、ヴィンシュヌの三神が織りなす複雑な宗教的背景は、深い宗教史的洞察なくしてはメスを入れられない。アーリヤの宗教と、非アーリヤの宗教との対立から統合へのプロセスは、ドラヴィダ的要素がアーリヤ的要素とミックスした、という単純な思考では解決できない。著者は、土着文化のサンスクリット化 (Sanskritization) の現象に注目する。そこから、土着固有の神々をバラモンの崇拜する神々と同一化させようとした。他方、ヴェーダ・ウパニシャッドの知識に対して儀礼を重視するタントリズム。そして『マハーバーラタ』にみられるシヤクティ崇拜。タントリズムと結びつく女神信仰等々の諸問題が輻輳する。これらの諸問題に対して著者が示した諸見解は、今後のヒンドゥーイズムの研究に大きな指針を与えるであろう。

著者 L. Renou et J. Filliozat: *L'Inde Classique*,

I, Hanoi, 1949. II, Hanoi, 1953. の第一巻に収まる叙事詩、プラーナに関する文献資料と叙述や、前記ヴィンテルニッツ『インド文献史』(Bd. I, Ss. 259~) 中野訳『叙事詩とプラーナ』ルノー著『インド教』(渡辺照宏・美田稔訳。白水社、クセジユ文庫、昭和三十六年)、井原徹山著『印度教』(大東出版社、昭和十八年)、池田澄達遺稿『摩訶婆羅他の研究』(双文社、昭和三十一年)など、参考書として挙げておこう。

叙事詩文学として『マハーバーラタ』と並ぶ『ラーマヤナ』、更には古典サンスクリット文学など述べるべきものは多いが、限られた紙幅では十分に意をつくしがたい。今は、前記『インド文献史』の外に、田中於菟弥著『インドの文学』(世界の文学史九。明治書院、昭和四十二年)に譲りたい。

バガヴァッド・ギーター

『マハーバーラタ』の第六篇二十五章——四十二章に亘る十八章七百頌より成る『ギーター』は、凡そインド学を志す学徒にとって、一度は通過しておきたい聖典である。インド精神を代表する一書としての本書は、宗教哲学、文学、とりわけ神への誠信(バクティ)を説く豊か

な詩篇で、ヒンドウの聖典としてインド人の精神を代弁してあまりあろう。

ギター研究には、辻直四郎著『バガヴァッド・ギター』(刀江書院、昭和二十五年)を先ず挙げたい。この書は、ギターに関するあらゆる問題を整理し体系づけ、「公平にギターの内容を紹介」したものである。総説にギターの所属派、年代、他の哲学宗教諸派との関係、ギターの伝承と研究、本書の内容を解説し、本論において靈魂と肉体(第一章)、神(第二章)、輪廻(第三章)、道徳(第四章)、解脱の道(第五章)、解脱(第六章)に關説し、附録、主要文献、引用の索引を加えている。今後、ギターを学ぶ後輩学徒に広く味読をすすめたい。『ギター』の翻訳については、これ又、無数にあつて一々とりあげるわけにはいかないが、敢て推したるものとして、次の二書がある。

S. Radhakrishnan: *The Bhagavadgītā*, London, 1942.

F. Edgerton: *The Bhagavadgītā*, translated and interpreted. Part I. Text and translation, Cambridge (Mass.), 1944.

なお和訳として、高橋順次郎『印度古聖典』(世界聖典

全集、昭和二年。『聖婆伽梵歌』丙午出版社、昭和四年(再版)、服部正明訳「バガヴァッド・ギター」(『ヴェーダ・アウエスター』筑摩書房、昭和四十二年)がある。もし、重要な註釈の内容にふれたい場合は、

A. Mahadeva Sastri: *The Bhagavadgītā with the commentary of Shri Shankarāchārya*, Madras, 1897, 2nd ed. Mysore, 1901.

Vidyānānkāra Īśvaradatta: *Rāmānuja's commentary on the Bhagavadgītā*, Hyderabad, 1930.

S. Subha Rau: *The Bhagavadgītā*, translation and commentaries in English according to Sri Madhvāchārya's Bhāṣyas, Madras, 1906.

P. C. Divanji: *Critical Word-Index to the Bhagavadgītā*, Bombay, 1943.

G. V. Jacob: *A Concordance to the principal Upanishads and to the Bhagavadgītā*, Bombay, 1891.
W. Kirtel: *Verse index to the Bhagavadgītā. Pāda-index*, Leipzig, 1938.

があげられる。

学派哲学

インドの哲学については、木村泰賢著『印度六派哲学』（丙午出版社、大正四年。大法輪閣、昭和四十三年）やマックス・ミュラーの書 *Max Müller: The Six Systems of Indian Philosophy*, Oxford, 1899. があって、インド哲学と言えば六派哲学という名称が定着した。しかし、学派 (Darśana) と言われるものは六つに限らない。十四世紀のマダーヴァ (Madhava) の著『全哲学綱要』(Sarasvatī-saṁsangraha) は十六の学派名を掲げ、佛教、ジャイナ教も含まれている。にもかかわらず、依然として、学派哲学と言えば六派 (ミーマンサー、ヴェーダーンタ。サーンキヤ、ヨーガ。ニヤヤー、ヴァイシェシカ。) がその代名詞となっている。

さて、六派に関する研究には、少くとも次の手続きと段階とが要請される。

一、六派のそれぞれの所依經典(スートラ) (一但し、サーンキヤに限っては『サーンキヤ・カリーカー』(Sāṅkhya-kārikā) がこれに充当し、いわゆる十四、五世紀ころの『サーンキヤ・スートラ』は別一) に対する理解である。

二、しかし、凡そ「スートラ」といわれるものは、註釈書なくしては読解に苦しむ場合が多いから、各スートラの註釈書を解読する。 (cf. the *Upaniṣad*)

三、註釈書にも種々あって、註釈の註釈(=複註)もあるから、註釈者によって、スートラの理解が異なる場合がある。したがって、各註釈書を比較対照することによって、その註釈者が生存した時代の思想背景を考慮しなければならない。 (cf. the *Upaniṣad*)

四、六派の中で、とくに佛教側によって批判破折の対象となるものもあるし、又、佛教と相互交渉をもつものもある。他方、六派の内部にあって批判破折をなす場合(とくにサーンキヤとヴェーダーンタ)も多い。したがって、佛教との交渉と、六派内での交渉という面でも問題提起が多い。 (cf. *Upaniṣad* & *Upaniṣad*)

学派哲学の研究に当って、一学派の研究だけでも容易でないことに気づく。まして、他学派との交渉となると、何から手がけてよいか戸惑うのは当然のことと言わねばならない。そのためにも、先述した『インド思想史』、『インド哲学史』を通して各学派の体系を把握し、その構想を念頭におくことが先決である。その場合、各学派のスートラと諸註釈、それに関する参考文献、研究資料、

そして思想の展開とそれに関する参考文献などを、各学派ごとに整理しておくのが大事な基礎作業である。いわゆる文献資料の整理である。整理にあたっては、『インド思想史』や『インド哲学史』など、先学人がかかげる文献資料を参考にし、学会誌などに掲載された斯学同人の論文を加えて研究動向をさぐる。かくて、各学派ごとについて自分なりのメモを準備しておく。そこから、はじめて学派哲学研究のスタートがされる。

学派哲学に関する研究書の中で、筆者の学生時代から今日に至るまできつてもきりはなせないものに、宇井伯寿著『印度哲学研究』六巻がある。中でも、その第一、三巻に収められた学派哲学に関する諸論攷から受けた学恩は大である。研究方法の厳密さ、論旨の精緻さは他の追随を許さない。第一巻所収の「勝論正理学派と吠陀並に声常住論との関係」、「吠檀多経の源流及吠檀多学派の成立」、「正理学派の成立並に正理経編纂年代」、「勝論経及び弥曼達経の編纂年代」、「勝論学派の知識論」。第三巻所収の「勝論経に於ける勝論学説」などの諸論説は、何れも珠玉の論文として必読のものである。博士の『印度哲学史』は、これらの論攷を礎石として樹立された一大金字塔であり、インド哲学研究史上における古典である。

読者は、岩波書店刊(再版)の「解説」にその全貌をうかがうであろう。

六派の各派の研究動向については、別の機会を得て述べるとして、ここでは、現段階における「ストロ」及び「註釈」への導入部門となる内・外の翻訳についてのみ、ふれることにしたい。

◇サーンキヤ・カーリカー

本多 恵「サーンキヤ頌解説」(『大倉山学院紀要』第二輯、九一—二〇頁、一九五六年)。

服部正明「古典サーンキヤ体系概説—訳註—」(『世界の名著』1、一八八—二〇八頁)。

P. Deussen: *Die Sāṃkhya-karika*, übersetzt und erklärt von P. Deussen (*Allgemeine Geschichte der Philosophie*, I, 3. SS. 419-466.)

Dr. Har Datt: *Saṃkhya Karikā with Eng. trans. and Notes* by Dr. Har Datt.

註釈の主なるものについて

Har Dutt Sharma: *The Sāṃkhya-karika, with the Commentary of Gauḍapādācārya* by Har Dutt Sharma, Poona, 1933.

金倉圓照「サーンクヤ・タットヴァ・カウムデー」

『東北大学文学部研究年報』第七号、一九五六年)。

R. Garbe: *Der Mondschein des Sankhya-Wahrheit*, München, 1892.

Ganganatha Jha: *The Tattva-kamudī*, tr. by

Ganganatha Jha, Poona, 1934.

Ramesh Chandra: *Vācaspatiśāstra's Saṃkhyatattva-kamudī*, ed. by R. Chandra, Calcutta, 1935.

漢訳として、真諦訳『金七十論』(『大正藏』五四卷)。索引・研究書について、

本多 恵「六派哲学根本聖典索引」(『大倉山学院紀要』第一輯、一九五五年)。

山口恵照『サーンキヤ哲学体系序説』(アポロン社、昭和三十九年)。

同 『サーンキヤ哲学体系の展開』(アポロン社、昭和四十九年)。

◇ ヨーガ・スートラ

岸本英夫『宗教神秘主義』(後篇、ヨーガ経和訳・索引。大明堂、一九五年)。

佐保田鶴治『解説ヨーガ・スートラ』(恒文社、一九六六年)。

松尾義海「ヨーガ根本聖典一訳註」(『世界の名著』

1』二〇九—二四四頁)。

本多 恵『ヨーガ経・註』(平楽寺書店一九七八年)。

J. H. Woods: *The Yoga-System of Patanjali*, Harvard Oriental Series XVII.

この書は、ヴァイヤーサのヨーガ註(*Yāsa: Yogabhasya*)及びその複註(*Vācaspatiśāstra: Tattvaovaiśāradī*)二書の英訳。

◇ ニヤーヤ・スートラ

服部正明「論理学入門」(ニヤーヤ・バーシユヤ第一篇一、二章訳)——『世界の名著』三二—三九七頁)。

宮坂有勝『ニヤーヤ・バーシユヤの論理学』(山喜房佛書林、一九五六年)。

G. Jha: *Gautama's Nyāya-sūtras, with Vātsyāyana-Bhāṣya*, Poona, 1936.

Walter Ruben: *Die Nyāyasūtra's, Text, Übersetzung, Erläuterung und Glossar*, Leipzig, 1928.

◇ ヴァイシェーシカ・スートラ

金倉圓照『インドの自然哲学』第二篇、「チャンド

ラ・アーナンダの釈による勝論経の全訳」(平楽寺書店、一九七一。四九—九四頁)。

同 「ペダルルタダルマサンクラハ」和訳(『インドの自然哲学』九五—一二六頁)。

Ganganatha Jha : *Padārthadharmasamgraha of Praśastapāda, with the Nyāyakanḍali of Śrīhara translated into English* by Mahamahopadhyaya G. Jha, Allahabad, 1916.

B. Faddegon : *The Vaiśeṣika-system described with the help of the oldest texts* by B. Faddegon, Amsterdam, 1918.

なお、漢訳の慧月『勝宗十句義論』(『国訳一切経』和漢撰述、論疏部二十三「中村元」解説)及びその英訳として

宇井伯寿 (*Daijūpadārthasūtra*, Chinese Text with Introduction, Translation, and Notes by H. Uj, London, 1917.) がある。

ストトラに対する索引で、

Shūnyu Kanaoka : *An Index to the Vaiśeṣika-sūtra*. (『東洋学研究』第三号、一九六九年)。

◇ヴェーダーンタ・ストトラ(『ブラフマ・ストトラ

中村 元『ブラフマ・ストトラの哲学』(岩波書店、一九五一)。

S. Radhakrishnan : *The Brahma Sūtra*, 1960.

P. Deussen : *Die Sūtras des Vedānta*, 1887.

シャンカラ (Śaṅkara) 註

G. Tibaut : *SBE. vols XXXIV, XXXVIII, 1890, 1896.*

V. M. Apte : *Brahmasūtras*, Shankara-bhāṣya, Bombay, 1960.

ラーマヌジャ (Rāmānuja) 註

G. Tibaut : *SBE. vol. XLVIII.*

マダーヴァ (Mādhava) 註

S. S. Rau : *The Vedānta-sūtras*, 1904.

なお、部分訳として、

L. Ronou : *Prolegomenes au Vedānta*, 1951.

S.K. Belvalkar : *The Brahmasūtras of Badaṛāyaṇa*, 1923, 1924.

中村 元「シャンカラの小乗佛教批判」(『中野教授

古稀記念論文集』一九六〇年)。

同 「世界開展における因果関係」——シャン

カラの所論—二・一・四—十一—(鈴木財団「研究年報」一〇、一九七二年)。

服部正明「不二元論」——ブラフマ・ストトラに對するシャンカラの注解二・一・一四、一八一『世界の名著1』二四五頁以下)。

◇シーマーンサー・ストトラ

Mohan Lal Sandal: *The Mīmāṃsā-sūtra of Jaimini*, tr. into English by Mohan Lal Sandal, Allahabad, 1923-25. (The Sacred Books of the Hindus, vol. 27.)

金岡秀友「Mīmāṃsā-sūtra 試訳」(『東洋学研究』二二号、一九六七年)。

G. Jha: *Śābara-bhāṣya*, tr. into English by Gan-gānātha Jha. 2 vols., Baroda, 1933 f. GOS. 66.

インド佛敎論理学に関する文献資料については、今は述べない。なお、水野弘元博士還暦記念『新・佛典解題辞典』(春秋社)の第Ⅵ章インドの聖典(三一—九頁以下)に、六派に関する資料・解説があることを付記する。

五

現代インド・インド史

インド学の学問分野は広い。本学における最近の傾向として、インド宗教・哲学と並んで近代インド政治史と思想家へのアプローチ、並びにインド美術に関する関心度がとみに高い。この現象は、アジアに共通する東洋人のこころの回帰を、インドに求めようとする傾向と、インド佛敎との関わりの中で、インドは文化史的にも地理的にもはや近い国となったことに由来するようである。こうしたなかで、宗教、美術、思想もさることながら、

現代インドへの誘いは、現代インドがかかえている諸問題を「百聞一見にしかず」の心情から、そうさせるのかもしれない。読者は、現代インドへの道しるべとして、堀田善衛著『インドで考えたこと』(岩波新書二九七)、石田保昭著『インドで暮す』(同五〇七)、A・シーグフリート著本田良介訳『インド紀行』(同一九八)、辛島昇・奈良康明著『インドの顔』(河出書房新社、昭和五十年)、辛島昇『インド入門』(東京大学出版会、昭和五十三年)などを通じて、インドの顔を一瞥できるであろう。又、上野照夫著『インドの美術』(中央公論美術出版、昭和三十九年)

やH・A・ホフレイ著・関鼎訳『インドの音楽』（音楽之友社、昭和四十一・四十九年）を手引きとして、そこに付されている参考文献を利用することによって、新しい興味をよびおこすことであろう。

インド学への道しるべは、或いはインドの理解から始まる、と言って過言ではなからう。とすれば、先ずインドを理解することが先決かもしれない。その点で、前掲の書物はよきガイダンスの役目を果たすにちがいない。にもかかわらず、言語、習俗、宗教の複雑に絡みあうインドは、〈群盲撫象〉の譬喩にみられる如く、その全体像をにわかには把握できない。インドに関する数多くの書は、確かにインドの一面を正確に浮き彫りにしていたとしても、それがインドのすべてでないことも亦、確かな事実と言わねばならない。それ故にこそ、古典インドから現代インドへの正しい透視が要請されるのである。

インド学への道しるべと題して、インド学における若干の素描を思いつくままに書きとどめた。それは、本学におけるインド学コースを志す学徒のためのメモに外ならない。インド学研究への道しるべは、したがって又、別の角度から叙述されるであろう。

最後に、インド史に関する参考書を掲げて筆を擱きた

い。（現代史をも含めて）

山本達郎編『インド史』（山川出版社、世界各国史10、昭和三十五、四十八年）。

岩本 裕『インド史』（修道社、世界歴史叢書、昭和三十三年、四十六年）。

J・ネール著『インドの発見』（岩波書店、一九五三、五六年）。

D・D・コーサンピリ『インド古代史』（岩波書店、昭和四十一年）。

中村平治編『インド現代史の展望』（青木書店、昭和四十八年）。

荒 松雄『現代インドの社会と政治―その歴史的省察―』（弘文堂、アテネ新書、昭和三十三年）。

石田保明『インドの課題』（三省堂、昭和四十六年）。

蠟山芳郎『インド・パキスタン現代史』（岩波新書、昭和四十二年）。

玉城康四郎『近代インド思想の形成』（東京大学出版会、昭和四十八年）。

辻直四郎編『印度』（偕成社、南方民俗誌叢書五、昭和十八年）。

京大学出版社（一九六七年）。

A. L. Basham : *The Wonder that was India*, London, 1954.

Wm. Theodore de Bary : *Sources of Indian Tra-*

dition, 1, 2. Columbia University Press, New York and London, 1970.

(一九七八·三·二〇)